

750年を経て空海と菊姫との出会い

気比神宮と空海（宝亀5年774～承和2年3月21日835年）

空海は遺言の中に「もし、巖島神社と気比神宮に何かのことがあれば、高野山の私財を投げうってでも、社殿の復興に尽くさねばならない」と言葉を残している。土公の神様の横にも書かれている。空海や最澄の7日間のご祈祷など、気比神宮の重大さをうたっている。

敦賀空海関連寺としても有名な金前寺

弘仁2年(811年)弘法大使ご留錫(りゅうしゃく)あり。当山は気比神宮の奥の院として、伽藍十二坊を有し、本尊、袴掛観音(はかまかけかんのん)は縁結びの観音として靈驗あらたかであった。金前寺こそ、南北朝の延元に入るや、北国の鎮護(ちんご)として下向し給うた後醍醐天皇の皇子恒良親王(つねながしんのう)、及び尊良親王(たかながしんのう)を迎え奉って、気比社の祠官気比氏治(けひうじはる)氏以下いくたの忠勇義烈(ちゅうゆうぎれつ)の士が足利の軍をひきうけて一大決戦の本営となったが、武運つたなく足利軍に破れた。(現在金ヶ崎宮の地)



金前寺には96才の老師様がおられ、現在もお元気ですし、何よりも、ご家族が仲良く本当にホットし思わず微笑みが出て、来て良かったと思うところです。

菊姫 750年法要

平成30年(2018年)10月15日夜8時、福井県三方郡美浜町竹波の法栄寺にて、朝倉義景のお姫様がいますと、若狭文化研究会 会長 金田久璋さんの情報を得て、尋ねた所、朝倉義景正室(細川晴元の娘、晴元には菊姫は孫になる)一人娘の菊姫と判明した。平松家戦国時代から1代目、気比神宮大宮司 大中臣朝臣魚取公 平松美作守景吉(おおなかとみあそんうおとりこう ひらまつみまさかのかみけいきち 1596)の妻である。戒名ではなく地藏菩薩 木造御丈、一寸五尺 立体古仏仕立て、僧 空海彫刻と戦火に遭わず、確りと文面でも残されていた。お寺には由緒正しい高貴な人と伝えられていた。

元亀元年(1570年)4月、大宮司気比徳直等一族は、国主朝倉義景氏のために神兵・社僧を發して、織田信長の北伐を拒み、天筒山城に立ち籠り、大激戦を演じたが、遂に神官寺坊灰塵に帰して、四十八家の祠官・三十六坊の社僧は離散し、古今の社領は没収され、祭祠は廃絶の憂き目に遭った。この時平松美作守の弟中村兵庫(幼名源四郎)が天筒山に入り戦死。

敦賀市高野の山外、西に祭られている。(平成30年8月のお盆に出向いてきた)

この場所は1576年ごろに生きた美作守景吉、後に平松周家等、平松のテリト

リーの場所であった。現在はリラ・ポートの温泉のある場所で米原からくる敦賀インター出口の真下になる。祠（ほこら）から上を見上げると出口のゲートが見える。高野に温泉の出る土地があると母が言っていたことの意味が漸く分かってきた。

その後、気比大宮司、平松美作守景吉の妻、朝倉義景息女 菊姫の叔母に援助を受け、山車を作り豊臣秀吉が来た時に復興を見せた。敦賀の山車はここから始まった。（当 家 には 言 い 伝 え が あ る。）



敦賀の一大イベント9月に行われる気比祭り山車

宮司八家

東西北河端氏・石塚氏・石倉氏・平松氏の六家は大中臣魚取朝臣、平松某と言う。

平成の現在も2600年神代から続く直系である当家がお守りしている。

角鹿姓の島家・菅原姓の宮内家の計八家である。島家は角鹿の値である。

大中臣朝臣魚取公 776年(おおなかとみあそんうおとりこう)

日本で一番先に政治と神職を始めた人(敦賀から政治が始まったことから)
当然空海との年代は違うが、気比神宮の大宮司であった平松美作守が、菩薩像であれば末代までも大事に御守りしてくれるであろうとの心使いで持たせたものではないだろうか。当家は大中臣朝臣魚取公(776年現在で2600年続く直系)を先祖に持つ家柄であることから、ご住職様にも分かって頂き、長年探し求め750年を経て私の代で解明することが出来本当にうれしい。



私たち子孫がこれからも御守りしていきたいと思ひます。

「古文書の街敦賀」平松周家「社記」上巻（本年度出版）当家に伝わる大中臣朝臣魚取公 平松美作守景吉と菊姫の掛け軸の写真をご住職にお渡しし、後日改めて750回忌の法要をお願いしたきた。

平成30年10月25日

福井県敦賀市曙町9-16 TEL0770-23-7093

小松邦子（平松家12代目平松巖 3女）